HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	基体と質料 : アリストテレス『形而上学』Z3研究
Author(s)	千葉, 恵
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 110, 1-22
Issue Date	2003-07-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34050
Type	departmental bulletin paper
File Information	110_PL1-22.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究科紀要 110 (2003)

基体と質料：
アリストテレス『形而上学』Z3研究

千葉　恵

1　はじめに

アリストテレス哲学における一つのアポリアは，いかにして蓋然的なものをめぐる弁証術が哲学的知識（Sophia）をもたらす形而上学の基礎を提供するかというものである。例えば，T. Irwin は「彼は形而上学において実在論者であるが，弁証術的哲学を実践しているので，彼の方法と彼の諸結論のあいだの明らかなギャップは相当衝撃的である。そしてわれわれにいくつかの問いを生じせしめる，アリストテレスが自分でそれらの問いを見ているにしてもいないにしても」と述べている(1)。弁証術と形而上学の関係をめぐるこのような理解に対して，私はその一つの解決案として『アリストテレスと形而上学の可能性』において，これまでアリストテレスが自覚的に区別していた弁証術の実践と理論が判別されてこなかったことを指摘した(2)。弁証術の理論であるトポス論は存在の一般分析である範疇の理論とプレディカビリアの理論に基づいている。例えば，アリストテレスは定義，固有性，類そして付帯性の四つのプレディカビリアをめぐり，一つのトポス（議論の場所）を立てている。「一つのトポスは，或るものに他の仕方で属するものを相手が付帯性として割り当てたかどうかを見ることである」(109 a 34 f)。そして，どんな命題にも共有見解のもとにプロとコントラの議論を立てる弁証術的実践はプレディカビリアの分析に基づくトポス論を規範として遂行される。

アリストテレスは術語として「ディアレクティコース」と「ロギコース」

という二つの副詞表現を区別しており，共有見解という蓋然性のうちにある弁証術実践の遂行はディアレクティコースになされ，トポス論は弁証術の理論としてロギコースに構築されている。「ロギコース」はしばしば「通常その意味は軽蔑的」(D. Ross) な用語であるとされてきたことは，単なる「概念分析」(G. Owen) という理解とともにアリストテレス研究上大きなスキャンダルであると言える(3)。ロギコースとは「いかに語るべきか」という視点から，本来的な語り方の分析を通じて事物の「いかにあるか」をめぐり存在主張する言論の構成力のことである。そこでは，論理法則を基礎に存在の一般的な表現分析である範疇やプレディカビリアそして同と異，一と多などを用いて，なんらかの存在様式を「～なければならない」という仕方で要請ないし主張することである。例えばZ4において，本質は第一義的には実体に属さなければならないことがロギコースに主張されている (1030 a 28-31)。このように「ロギコース」は弁証術および形而上学に通底する方法である。従来，ディアレクティコースになされる弁証術的実践とロギコースに構築される弁証術の方法・理論の判別がなされなかったために，どんな命題であれ共有見解に基づきプロとコントラの論拠を提示する実践がどのような仕方で存在論つまり存在の構成原理の探求に寄与しうるのかが明らかにされなかったのだと思われる。

ロギコースはピュシコースやアナリュティコースという手法と相補的に展開し，アリストテレス哲学構築の基本的な方法論として機能している。これらの方法のもとに形成される質料形相論自身が抱えるアポリアをロギコスな次元における議論を明確にする時，解決できるものがあると思われる。第一質料の問題や形相が個別的なものであるのか普遍的であるのかと言った諸問題に展開力のあるアクセスをつけることができると思われる。さらに事物の構成における質料の特定における端的必然性と条件的必然性のピュシコスな二つの記述が，Z3における質料はそれ自体としては範疇存在のいかなるものでもないという理解と整合するかどうかは大きな問題である。一方，生成の説明において，たとえ質料の生成は現実にはゴールを前提にした目的論的なものであるにしても，ゴールへの言及なしに四元素が持つ熱冷乾湿の力と

してだけ質料の生成の必然性を事物の生成の十分条件を特徴づけるという仕方で記述することができるとされた。これは目的論的なシステムとは独立に物理的，生理的な記述が可能であるという今日的な主張である。他方，生成のゴールに条件づけられて常にそのゴールとの関連でゴールの質料として生成の必然性を記述することができるとされた。例えば，胎膜の形成はミルクを熱すると必然的に表面に膜ができるように，受精卵の持つ熱が胎児を包む胎膜を必然的に形成するとされる。他方，同時にそれは胎児を保護するために形成される。そこでは「それは必然性に基づきまた何かのためにでもある」(739 b 28) と特徴づけられる。前者は端的必然性と呼ばれ，後者は目的的に質料が秩序づけられるために，条件的必然性とよばれる。これら二つの必然性が共存可能であることは拙著第五章で論じられた。これら二つの視点はそもそも維持可能であるのかはＺ３の質料の記述と整合的に理解できるかに依存している。私は本稿において，実体の基体性条件とでも言うべきものがロギコースに論じられ，質料がそれを満たしうるものであるかを吟味するＺ３の議論を分析することにより，質料の諸特徴を明らかにしていきたい。Ｚ３は次のように議論が展開される。

2

実体は，たとえそれより多くの仕方ではないとしても，少なくとも，とりわけ四つの仕方で語られる。即ち，本質と普遍そして類，そしてそれらのうちの四番目のものである基に置かれるもの［基体］がそれぞれの実体であると思われている。(A)ところで，基体とは他のものがそれについて語られるが，そのかのものそれ自体 (ekeino auto) はもはや他のものについて語られないところのものである。それ故に，第一に，これについて確定しなければならない。というのも，第一の基体が実体であるととりわけ考えられているからである。しかし，質料が或る仕方ではそのようなものであると語られ，他の仕方では形態が，第三の仕方ではそれらに基づくもの［統合体］がそのようなものであると語られている。質料と私が言うのは例えば銅であり，形態と

は見え姿の型であり，統合体とは像のことである。従って，もし形相が質料よりもより先でありまた一層存在するものであるなら，それは同じ論法により双方に基づくものよりもより先であることになろう。かくして，今や，一方，(B)実体が一体何であるのか，即ち，基体について語られることなく，他のものどもがそれについて語られるところのものであると概略語られた。しかし，他方，そのような仕方だけで語るべきではない。それでは十分ではないからである。つまり，その規定自体が不明瞭であり，しかも質料もなお実体となるからである。というのも，もし質料が実体でないなら，他の実体が何であるかを把握し損ねてしまうからである。(C)というのも，他のものどもが取り除かれるとしたなら，基に留まるものは何も現われないからである。なぜなら，他のものどもとは，一方，物体の様態であり産物でありまた能力であり，他方，長さや幅や深さであるが，それら［三つの次元］は何らかの量であり実体ではないが(つまり量は実体ではない)，むしろそれらが第一に属するところのかのものが実体であるからである。確かに，長さが取り除かれ，また幅が取り除かれ，そして深さが取り除かれる時，私たちは基に残されているものを何も見出さない，もしそれら［取り除かれた長さ，幅，深さ［非長，非幅，非深］］によって規定されるものが何かあるというのでなければ。従って，このように考察する人々には，質料だけが実体であると現れていること必然である。

(D)しかし，「質料」とは，それ自体では，存在がそれらにより規定されているところの何かともどれほどとも何か他のいかなるものとも語られることのないものであると私は言う。というのも，これらのそれぞれがそれについて述語づけられるところの何かがあり，その存在は範疇のそれぞれとも異なるからである。なぜなら，一方，他のものどもは実体について述語づけられ，他方，実体は質料について述語づけられるからである。従って，最後のもの［質料］はそれ自体では何かでも，どれほどでも，他の何ものでもない。もちろん，諸否定も範疇のいずれでもない。というのも，それらも付帯的に事物に属するからである。(E)かくして，これらに基づき考察する人々には質料が実体であることが帰結する。しかし，これは不可能である。というのも離れ

てあることと「或るこれ」がとりわけ実体に属するように思われるからであり，それ故に形相と統合体が質料よりも一層実体であると考えられえようからである。統合体と私が言うのは質料と形態に基づくもののことであるが，後に明らかになるであろうから，ほおっておこう。質料もまた或る意味で明瞭である。そこで，第三の実体［形態］について考察しなければならない。というのも，これが最もアポリアに満ちているからである。可感的事物の或るものどもが実体であることは同意されているので，まずこれらのうちに，それを探求しなければならない（Z 3.1028 b 33-1029 a 34)。

3

Z3の凝縮された論述を理解するための一つの問いはアリストテレスのそれまでの質料や形相の議論さらには基体をめぐる述定の理論をどれほど前提にすることができるのか，或るいは，必要とするのかというものである。実体とは何であるかを候補を挙げて探求するさいに，実体についてのどれだけの了解がなされているのかが問われよう。現代の研究動向としては，『範疇論』における基体や実体理解と『形而上学』中心巻のそれが両立するかどうかをめぐって多くの議論がなされている。そしてそこでは〝compatibilist〟と〝incompatibilist〟という仕方で陣営が分類されている(4)。この動向も実体は何であるかの探求において，『範疇論』の実体理解がどれほどの位置を占めるべきかの問いであると解することができる。私はここではその問題を直接問うことをせず，その視点からテクストの分析をすることはしない。Z3の理解のために，少なくとも確かなこととして明確に言えることは，彼がZ1-2の議論を踏まえているということである。これは疑い得ないので，ふたつの章における議論をまず振り返っておこう。

『形而上学』Z巻において，存在とは何かが探求される。そして存在の探求はZ1において「第一義的にある，端的にある」（1028 a 30 f）と語られる「実体」を探求することであるとされる（1028 b 4)。Z1において，存在の帰一性構造が因果論的に論じられる。存在である限りの存在の探求は第一義的に「あ

る」と語られるものに依拠している。端的な存在を解明しうるならば,「ある」と言われる限りのすべての存在者もそれとの関連において「ある」と言われるので，第一の存在を探求することが存在である限りの存在について解明のアクセスを持つと言える。アリストテレスは帰一性構造について次のようにアポリアを提示し，因果論上第一のものを実体として確定する。そのさい，因果論的分析においては存在の範疇分類が前提されており，実体範疇は「何であるかそして或るこれを意味表示する」(1028 a 11 f) と言われている。彼は実体による存在の帰一性構造を次のように展開する。

「ひとは，はたして「歩くこと」と「健康であること」そして「座ること」は諸範疇のそれぞれであるのかそれともあらぬかと，また他のそのようなものどもの何かについても同様の仕方で，アポリアを提示するであろう。というのも，それらのいかなるものもそれ自体に即してあるのでも，実体から分離されうるものでもないが，かえって，いやしくも「歩くもの」また「座るもの」また「健康なもの」が存在者に属するのなら，一層それらは存在するからである。それらは一層存在するものであるように見える。というのもそれらには何らかの規定された基体（即ち実体でありまた個別者である）が存在しており，まさにそれはそのような範疇に反映されているからである。というのも，「善きもの」や「座るもの」はそれなしには語られないからである。かくして，あのものども［諸範疇存在者］のそれぞれも実体ゆえに存在すること明らかであり，従って，実体は第一義にあるものであり，また何かではなく端的にあるものであろうこと明らかである。ところで，第一のものは多くの仕方で語られる。しかし，実体はあらゆる仕方で，つまり説明言表，認識そして時間においても第一のものである。というのも，他の諸範疇のいずれも離存的ではないが，それだけは離れてあるからである」(1028 a 20-34)。

これが存在の範疇分析から析出される，存在の帰一性構造である。ここでは他の範疇存在者は基体である実体から分離されえず，その存在を実体に依存していると論じられている。実体はそれらに対する「規定された基体」であると表現されている。この帰一性構造は基体について述定様式の視点から追及する可能性を示唆している。

存在は多くの仕方で語られるが，端的に在ると語られるものである実体に基づき帰一性構造を持つことによって秩序づけられていることが確認されたうえで，何が存在を秩序づける実体であるのかが続いてZ2において問われる。そこでは先行哲学者たちにより何が実体であるかの候補が挙げられる。アリストテレスは「火」「水」「土」さらにそれらから構成される「宇宙」や「太陽」のような「自然物体」さらには「表面」「線」「点」のような「物体の諸限界」，また非可感的な「形相と数学的対象」さらには「魂」などが端的な存在とみなされてきたことを紹介している。少なくとも，これらの議論を踏まえて，Z3の議論は理解されるべきである。

4

Z3冒頭において，彼は実体の候補を一般的な仕方でせいぜい四つであると分類している。「本質」「普遍」「類」そして「基体」がその候補として挙げられる。Z巻において，これらの候補が吟味されている。最初にZ3において基体が吟味される。「本質」はZ4-6，Z10-11そしてZ17で論じられる。「類」を含む「普遍」はZ13-16で論じられ，実体の候補としては否定的な取り扱いを受ける。なお，「類」と「普遍」が候補とされていることは，これらの四つが必ずしも相互に排他的なものであるとは限らないことを表している。例えば，「本質」と「基体」が同一事物を指示する可能性があることを示唆している。なお，Z3冒頭でこれらの四つは「それぞれの実体であると思われている」とされる。ここで「それぞれの」という属格表現が何を意味するかは直ちには明らかではない。しかし，「実体」が「それぞれの」という形容を受け入れうるような一般名詞であることを示している。それぞれが何らかの存在者を意味することは明らかであり，「実体」は何らかの存在者を存在者として秩序づける端的な存在，実有とでも言うべきものを意味している。

普遍や類にとって「それぞれ」とはそれより外延の小さな存在者を意味しようが，その存在者の端的な存在は普遍や類に属しているという主張である。普遍や類が実体であるとは，例えば，カリアスの実体は人間や動物であるが，

もしそうであるとすれば，人間と動物ではどちらがより実体であるかの問題がただちに提起されよう。ともあれ，これは人間や動物であることの故にカリアスは一つの存在者であるという主張であると解しうる。他方，「本質」とは「[Xにとって Xで] あることは何であったかということ」を意味する。これはプレディカビリアが説明される『トピカ』で提示されている。四つのプレディカビリアは「定義的」と呼ばれ，ソクラテス的な「何であるか？」の問いに対する可能な応答の四つのタイプとして提示されている（102 b 27-35)。本質はその一つである定義により開示されるものであり，「まさにそれであるところのもの」としての「もの自体」を意味している。Z 6 で「それぞれと本質は同一かそれとも異なるのか」（1031 a 15 f）が問われるが，それぞれとそれぞれの本質つまりもの自体が同一であるか否かが問われている。具体的には，人間と人間それ自体，カリアスとカリアスそれ自体は同一であるのかが問われていると言えよう。そのさい本質が実体であるとはそれぞれのもの自体がそれぞれにとって端的な第一の存在であるということ，自ら自身の故にカリアスはカリアスという存在者であるということを意味していよう。「それぞれ」により，ここでは定説と言える『範疇論』で展開される「基体のうちになく，基体について語られることのない」カリアスやソクラテスのような個体実体を理解すべきであると一般に主張されている。それらは範例ではあろうが，ここでは Z 1-2 を受けて，「歩くこと」や「善」そして「数」などの存在者であっても，実体によりその存在が秩序づけられるものであれば，何でもその例たりうると広く解したい。かくして，この章の課題は本来的な述定の基準となる基体による因果論的な帰一性構造を質料形相論的分析により明確にし，実体を確定していくことである。M. Wedin などが主張するように，ここでは『範疇論』における実体の実体（substance of c-substance）がつまり個体存在者の端的な存在が問われているだけではなく，何であれ範疇存在者を存在者として秩序づける端的な存在が問われている(5)。

最後の候補である「基体」がそれぞれの実体であるとは，それぞれの存在者の基に置かれているものがそれぞれの端的な存在であるという主張である。なぜかと言えば，自らそれ自身はもはや他のものの述語とならず，他の

ものがそれについて述語づけられるところの究極の主語は，存在論的次元においては存在の帰一性構造を支える究極的な要の位置を占めると思われるからである。Z３ではこの基体となりうるものの質料形相論的分析が企てられている。つまり基体とは実際いかなる存在者であるのかの解明がめざされている。そしてその解明に対しては，実体についての帰一性構造などこれまでの一般的特徴づけが前提されている。前節で，実体は他の範疇諸存在者の存在の根拠であり，他の存在は実体から離存できずに，実体との関連においてその存在が規定されるものであること，他方，実体だけが離存的であることが確認された。Z３はこれらの実体理解を前提にして基体が因果論的に分析される。

まず「基体」は次のように定義され，主題とされる。(A)「基体とは他のものがそれについて語られるが，そのかのものそれ自体はもはや他のものについて語られないところのものである。それ故に，まずこれについて分析されねばならない。というのも，とりわけ第一の基体が実体であると考えられているからである」(1028 b 36-29 a 2)。基体となるものは，述定系列を辿りつつ，そのもの自体がもはや他のものについて語られないものでなければならない。「もはや……ない（meketi）」という表現により述定系列の究極の主語のことが「かのものそれ自体（ekeino auto）」という語を伴い指示されている。この基体の定義は「究極主語基準」と「自己同定基準」とでも呼ぶべき二つの基準により構成されている。もはや他のものについて語られないものは究極的な主語と呼びうるであろう。さらにここではそれが「かのものそれ自体」として表現されていることはなんらかの仕方で自己同定されうるものでなければならないことを示している。かくして「第一の基体」は「究極主語基準」と「自己同定基準」を満たすもののことである(6)。この二つの基準を満たすものが第一の基体となることから，二つの基準をあわせて「第一基体性条件」と呼ぶことにする。かくして，それにより存在の帰一性構造が把握されるところの自己同定を伴う述定の究極の主語を質料形相論のなかで探すことがここでの課題となる。Z１における実体による存在の帰一性構造がここでは基体という究極主語基準と自己同定基準の提示により具体的に展開される。

Z3においてアリストテレスは基体の規定をまずこのように行い，その候補となる質料，形相，統合体を挙げ，抽き去りの思考実験により「基に留まる」質料だけが実体であるという人々の見解を紹介する。基体の候補としてこれら三つが挙げられるが，その表現は慎重であり第一基体性条件を満たすものであるか否かはこの時点では明らかではないことから，「そのようなもの」は「或る仕方では」という留保をつけた仕方でこれら三つの候補が挙げられている。このことはこれらの三つは何らかの仕方で基体ではあっても第一基体性条件を満たさない可能性を示唆している。

続く抽き去りの思考実験はカントが純粋理性の第二のアンティノミーとして提示した，世界における複合的な実体が分割不能な単純な部分から構成されているか否かという形而上学的関心と重なる。彼らは抽き去りの対象である事物の長さや幅そして深さが「第一にそれに属するところのかのものが実体である」(29 a 15 f) と述べる。これを実体の「内属性基準」と呼ぶことにする。さらに，この立場の人々は「このように考察する人々」(a 19, cf. 26) と指示されるが，彼らを「質料実体論者」と呼ぶことにしよう。抽き去りの思考実験は述定の系列を辿ることによって実体を確定するという第一基体性条件による探求とは異なるものであるが，アリストテレス自身この企てを他の箇所で行っており，少なくとも実験の有効性を承認している (cf. *Phys.* IV 2. 209 b 9-11)。彼は，続いて，質料実体論者の論証方法をあらためて述定の系列の論述に組み込み，吟味している。その吟味により，質料実体論者のような内属性基準により提示される質料が実体であるという主張は「不可能である」とされる。質料が実体の条件である究極主語基準と内属性条件を満たすにしても，自己同定基準と関わる或るこれ性条件と離存性条件を満たさないためであるとされている。

以上のようにこの章の議論の展開をまとめることは，異論の余地のあるものである。それについては詳しく彼の議論を検討することにより応答しよう。それによりZ3におけるアリストテレスの議論が他の中心巻の議論と両立しないとか，混乱しているという批判に応答したい(7)。また，私に興味深く思われる論点は伝統的には第一質料がここで論じられていると解釈されている

が，はたしてそうであるのか，そうであるとして第一質料についてこの章はどれだけのことを確定的なこととして語っているのかを吟味することである(8)。この問題との関連で範疇存在のいかなる分類にも属さないとされる「最後のもの（質料）それ自体」ということでいかなる存在者が理解されているのかを明らかにしたい。これはアリストテレスの他の文脈における質料理解との整合性を問うことでもある。

5

冒頭の第一の基体の定義は，究極主語基準と自己同定基準により，本来的な述定がいかになされるべきかを定めるが，それがロギコスなレヴェルでの議論であることを確認しておこう。何かが実体であるためにはこの第一基体性条件をロギコスレヴェルで満たさなければならない。第一基体性条件の前提に本来的な述定と非本来的な述定の区別がある（cf. An. Post. A 22)。彼は次のように述べている。

「われわれはここで一般的に語ろう。「白いものが歩いている」「あの大きいものは木である」と語ることは真である。そして逆に「その木は大きい」「その人は歩く」と語ることも真である。もちろん，このように語ることとかのように語ることは異なる。というのも，一方私が「その白いものは木である」と言う時，私は白であることがそれに付帯したところのものが木であると言っているが，木にとっての基体としてその白いものがあるとは言っていない。つまり，それは白であることによって，または何かまさに白いものであることによって木となったのではなく，従って，それは付帯的にという仕方以外においてではない。しかし，私が「その木は白である」と言う時，何か異なるものが白く，かのものに木であることが付帯したということを言ってはいない。例えば，「その芸術的なものは白い」と私が言う時のように。即ち，その時私はその人が白いものであり，その人に芸術的であることが付帯したということを意味している。むしろ，私はその木が基体であり，それはまさに木であるものか，または何らかの木であるものとは異なる何ものかである

ことなしに，白くなったものであると言う。もし規則を定めなければならないとすれば，後者のように言うことが述語づけることであり，前者のように言うことはまったく述語づけではないか，端的に述語づけずに，付帯的に述語づけているとしよう」(83 a 1-17)。

この規則化を「本来的述定」と呼ぶことにする。本来的述定を成立させているのが存在の範疇分類であり，それは実体が基体となることを要請する。木や人のような実体範疇が基体となり，他の諸属性が述語づけられる。しかし，実体が何であるかを特定する企てのなかで，この本来的述定は実体理解に依存しており，範疇分析を用いることは循環証明に陥るのではないかという疑義も提示されよう。端的に言えば，世界の側での存在論的分節が本来的述定を基礎づけているのではないかと問われよう。それに対しては，次のように応答できよう。第一の基体はその定義が明らかにするところによればもはや他の何ものについても述語づけられることのないものであり，それ自体の同一性言明により自己同一を明らかにするものであった。それ故に，第一基体は自らとは異なるものであることなしに，まさにそれであるところのものであると語られるものであることによって，このような述定様式をもたらすものであると言えよう。もちろん世界の側で帰一的な構造を基礎づける存在者があるからこそ，述定の連鎖においてもそのような基体が析出されることには違いはないであろう。しかし，この箇所には「実体」への言及がなく，第一基体の特徴だけでこれだけのことを語りうるものであることが確認できる。もはや他のものについて述語づけられず，他のものが述語づけられるものとは，自らは他のものであることなしに，自己自身と同一であり，そのことによって他の諸属性が帰属するそのような存在論的特徴を持つことを述定の分析を通じて主張できると思われる。つまり「いかに語るべきか」という視点から実体を考察する時，本来的述定を満たすものが実体であると主張されている。ロギコースという手法は存在一般の分析において「いかに語るべきか」から「いかにあるか」を主張する言論の力である。

6

ここで，これまでの究極主語基準と自己同定基準がどれだけのことを実体探求においてなしうるかを踏まえて，続くＺ３の議論の展開を辿ろう。アリストテレスは，基体の位置を占めうる存在を慎重な仕方で提示する。「質料が或る仕方でそのようなものであり，他の仕方では形態が，第三の仕方ではそれらに基づくもの［統合体］がそのようなものであると語られる」（1029 a 2 f）。これら三つが基体となるその仕方が異なっているために，基体の定義は「そのようなもの」と厳密ではない仕方で語られている。質料の例は「銅」であり，形態は「見え姿の型」であり，それらに基づくものは「像」である。銅が或る型を持つことによりアポロン像となる，彫刻家によるそのような具体的な製作が念頭に置かれている（cf. 640 b 23-29）。これらはそれぞれ基体となる。「銅は金属である」，「アポロン像は男らしい」そして「その見え姿は明確である」などの述定がただちに考えられる(9)。

彼は続いて「従って，もし形相が質料よりもより先でありまた一層存在するものであるなら，それは同じ論法により双方に基づくものよりもより先であることになろう」（29 a 5 f）と述べ，三つの間に存在論的優先性をつけている。基体となりうるもののうちどれが実体であるかの解明が，より先であり一層存在するものを確定することにより企てられる。それにより実体は明らかとなる。形相が質料よりも，さらに統合体よりも先であり，より存在であるとされる。ただし，実体が何であるかを探求するこの文脈においては，「より先」そして「一層存在である」というこの比較級の発言は条件文のなかで提示されている。これはアリストテレスの確定した主張と取るべきではなく，可能性として提示されていると取るべきである。

それを受けて(B)「かくして，今や，一方，実体が一体何であるのか，即ち，基体について語られることなく，他のものどもがそれについて語られるところのものであると概略語られた。しかし，他方，そのような仕方だけで語るべきではない。それでは十分ではないからである。つまり，その規定自体が

不明瞭であり，しかも質料もなお実体となるからである」(29 a 7-10)と述べられる。この実体の規定(B)は第一基体の定義(A)と異なることが従来注目されることがなかったように思われる。(A)の「かのもの自身はもはや他のものについて語られない」における「もはや……ない」という表現が(B)にはなく，「基体について語られない」という表現により実体が規定されている。ここでの基体としての実体の規定は第一基体性条件としての究極主語を表現するものとは異なる視点から提示されていることが確認されねばならない。ここでは絶対的な視点から述定の連鎖を停止させる究極の主語が提示されるというのではなく，相対的な視点からその都度の述定が問題となっており，内属性基準の故に一見第一基体と思われる質料のみならず，形相や統合体も主語となりうることが示唆されている。実体の基体への言及による規定を「相対的主語基準」と呼ぶことにする。それ故に，この語り方が十分でないのは「概略」という言葉を待つまでもなく，複数の実体を承認することになるために「不明瞭」なものである。実体は相対的主語基準の他に，帰一性構造やその他の規定を受けてはじめて十全に理解される。さらにこの基準によれば，「質料もなお実体となる」ことになり，秩序づけられることなく，端的な存在が複数，数えあげられることになる。

彼は続いて質料が実体となることの理由を述べている。(C)「というのも，もし質料が実体でないなら，他の実体が何であるかを把握し損ねてしまうからである。というのも，他のものどもが取り除かれるとしたなら，基に留まるものは何も現われないからである」(29 a 10-12)。質料の先行性が前文の理由句になるためには，具体的な例による補いを必要とする(10)。アリストテレスはここで形態と統合体が何であるかを把握し損ねると言っているが，具体的には先の像の事例が念頭に置かれている。質料としての銅が端的にあるのでないとしたなら，その形態そして統合体であるアポロン像は認識されないであろうということである。その上で抽き去りの思考実験を行う。抽き去りの思考実験によれば，質料が実体でなければ，他の実体はわれわれの認識から逃れ去ってしまうことが明らかだからである。そこでは質料による帰一性構造を抽き去りの実験により確立し，質料だけが実体であるという主張を許す

思考実験が提示されている。

7

思考実験は次のものである。「というのも，他のものどもが取り除かれるとしたなら，基に留まるものは何も現われないからである。なぜなら，他のものどもとは，一方，物体の様態であり産物でありまた能力であり，他方，長さや幅や深さであるが，それら［三つの次元］は何らかの量であり実体ではないが(つまり量は実体ではない)，むしろそれらが第一に属するところのかのものが実体であるからである。確かに，長さが取り除かれ，また幅が取り除かれ，そして深さが取り除かれる時，私たちは基に残されているものを何も見出さない，もしそれら［取り除かれた長さ，幅，深さ［非長，非幅，非深］］によって規定されるものが何かあるというのでなければ。従って，このように探究する人々には，質料だけが実体であると現れていること必然である」(29 a 11-19)。

この思考実験は興味深い。最初の文で「基に留まるものは何も現れない」と訳した箇所には異論がある。この箇所については「何も一切残らない」と「何も知覚可能なものは残らない」という二つの解釈が提示されている。一切残らないと考えるひとは三次元の量すべてを取り去れば，何も残らないのは自明であろうと主張する。M. Schofield は前者の解釈を採るが，「他のものども」との対比で「留まるもの・残されるもの」が語られるので，一切残らないとすれば，この対比は崩れてしまう(11)。尚，何も残らなければ 1029 a 18 f で質料だけが実体の候補となるという思考実験の結論は導かれないだろう。

ここではわれわれに知覚可能な物体を想定し，そこから最初にその物体の表面的なつまり知覚可能な諸属性例えばカリアスが蒙っている病気や彼が生み出す書物や語学の能力などを取り去ってしまおう。さらに，彼の身体それ自身が帰属する三つの次元例えば彼の身長や両手を広げた幅さらには胸囲を取り去ってしまおう。抽き去りの対象は「諸物体」とあるから，像やカリアスのような具体的な個体を対象としていると解すべきであろう。第一質料を

主張する人々は「諸物体」によりこの宇宙の三次元を占めるもの一切と採ってもよいとするであろう。その場合にも残る，あらゆる変化の基体となる永遠的な物理的存在者をそこから導出するであろう。宇宙のいかなる事物も個体であり，それらが四元素を根源とするものであるなら，一つの個体から三次元の量を抽き去る場合でも，三次元の宇宙全体を抽き去る場合においても，同じことになる。従って，テクスト上より確かなこととして，一つの像の抽き去りをモデルにして考察しよう。その場合でも，三次元の諸属性を取り除くなら，四元素のそれぞれの変化や混合のもとには同一の基体があるのか，もしそうであるとすれば，それは何であり，いかなる意味で同一であるのかが問われよう。しかし，この箇所ではそこに残る質料はプラトンが想定する「場」のことなのか，自然学者たちが想定する「空気」や「無限定」な何ものであるのかは追及されてはいない（cf. *Phys.* IV 2. *Tim.* 52 A-D)。

ここで挙げられた基体の三つの候補つまり像とその素材さらにはその見え姿の型は，質料である銅という素材なしにはわれわれの感覚的認識にかからない。見え姿という次元で形態を理解する限り，三次元が抽き去られる時，少なくとも形態そして像全体も一緒に取り去られてしまうであろう。アポロン像の長さや幅や深さがなくなっても，それらが第一に属していた銅のかたまりは残るであろう。そのことを明確にするのがこの思考実験の眼目である。質料実体論者によれば，この思考実験において，実体は属性がそれに内属する第一のものとして理解されている。量が実体なのではなく「むしろ，それらが第一にそれに属するところのかのものが実体である」(1029 a 15 f)。像の抽き去りにおいては，銅の固まりが留まると言える局面がある。しかし，思考実験そのものは，もっとラディカルに基に残るものも知覚されないそのようなケースを考えている。それは感覚的に認識されないにしても，他の一切の属性を内属させるものとして他の諸属性を帰一的に統一すると主張されている。ここでは「語られる」という視点からではなく，「属する」という内属性基準の視点で実体が特徴づけられている。アポロン像から長さや幅や深さを取り去っても，それらが第一に属する銅は残るということがらとの類比関係において理解されるべきものとして，極端な思考実験が企てられていると

言えよう。

思考実験の結論として，三次元を取り去る時，われわれが基に残されるものを感覚上「見る」ことはないと言われる。ただし，彼は慎重に「もしそれら［取り除かれた長さ，幅，深さ［非長，非幅，非深］］によって規定されるものが何かあるというのでなければ」(29 a 18) と留保を立てている。三次元のいずれでもないものつまり具体的な長さや幅や深さの否定例えば十次元のものによって何か規定されるものがあるとすれば，われわれは何かを知覚するでもあろうが，そのような否定により基体が規定されることはない(12)。これらの議論の結論は「従って，このように考察する人々には，質料だけが実体であると現れていること必然である」(29 a 18 f) というものである。「このように考察する人々」とは内属性基準のもとで，思考実験により他のすべてを取り去る時に，そこに留まる存在者を特定しようと企てる質料実体論者のことである。

8

続いて，アリストテレスは究極主語基準と自己同定基準つまり本来的述定基準から，この思考実験を吟味する。Wedin によれば，アリストテレスは 1029 a 20-27 においてこの思考実験の「補助議論」を展開していると理解される(13)。彼は「アリストテレスは彼がA 1［1029 a 10-19 抽き去りの思考実験］における「質料」によって，そしてより個別的には，その帰結 MAT［質料だけが実体である］において彼が理解しているものの明白な言明をわれわれに与える必要を明らかに感じている」と述べている。私は彼がここで思考実験の補助議論を提示しているとは考えない。彼はここで第一基体性条件により質料のみが実体であるという思考実験の結果を吟味し，反論しているのである。

(D)「しかし，私は「質料」とは，それ自体では，存在がそれらにより規定されているところの何かともどれほどとも何か他のいかなるものとも語られることのないものであると言う。というのも，これらのそれぞれがそれについ

て述語づけられるところの何かがあり，その存在は範疇のそれぞれとも異なるからである。なぜなら，一方，他のものどもは実体について述語づけられ，他方，実体は質料について述語づけられるからである。従って，最後のもの［質料］それ自体は何であるかでも，どれほどでも，他の何ものでもない。もちろん，諸否定も範疇のいずれでもない。というのも，それらも付帯的に事物に属するからである。かくして，これらに基づき考察する人々には質料が実体であることが帰結する。しかし，それは不可能である。というのも離れてあることと或るこれがとりわけ実体に属するように思われるからであり，それ故に形相と統合体が質料よりも一層実体であると考えられえようからである」(29 a 20-30)。

ここで重要な問いは質料がそれ自体として記述されるとき，それはいかなるものであれ質料一般が自体的に語られる場合の存在様式が主張されているのか，それとも質料実体論者が主張する思考実験のもとでの実体であるとされるその質料を本来的述定のもとに吟味しているのかというものである。そもそもなぜここで質料それ自体が問われているのか。私はこの部分が質料実体論者の二つの主張，一方は質料だけが実体である（1029 a 19）というものと，他方は質料が実体である（29 a 27）とする主張のあいだにはさまれていることに注目したい。この議論が加えられることによって，質料実体論者はその見解を弱めたのである。そのことは質料実体論者の最初の主張の吟味と採るべきことを示唆している。論者の内属性基準による主張に対し，究極主語基準と自己同定基準から吟味を加え，質料が「いかにあるか」について，いかなる範疇存在でもない何ものかであるという存在主張が導かれている。従って，質料実体論者の内属性基準からの質料の実体主張を第一基体性条件から捉えなおしたものであると理解すべきである。なぜここで「質料それ自体」「最後のもの［質料］それ自体」が問われているかと言えば，質料実体論者は内属性基準からして，抽き去りのあと残されるものがそれ自体として第一に存在していると主張していることにある。質料はそれ自体として存在する端的な存在者であると言う主張を受けて，アリストテレスは質料それ自体を第一基体性条件に基づき吟味している。興味深いことに，アリストテレス

はその思考実験においては注意深く「基体」という語を用いることを避けている。それは厳密には第一基体性条件を満たさないからである。それは「第一基体」と呼ばれえないものであり，せいぜい相対的主語基準を満たすだけである。

彼は「これらのそれぞれがそれについて述語づけられるところの何かがあり，その存在は述語の諸形態のそれぞれとも異なる」と述べ，質料は他のものが述語づけられる何ものかではあるが，範疇分類を受け付けないとされる。彼はその何かであることの理由をここでもやはり述定の序列に訴えて説明している。「なぜなら，一方，他のものどもは実体について述語づけられ，他方，実体は質料について述語づけられるからである。従って，最後のもの[質料]はそれ自体では何であるかでも，どれほどでも，他の何ものでもない」。例えば，「カリアスは白い」と述定できる。そこでは実体について性質が述語づけられている。カリアスはまさに他のものであることなしに，白くなっているのである。これは本来的述定であり基体とみなしうる。他方，実体が質料について述語づけられるとされる時，それはいかなる仕方でそうなのであろうか。「質料それ自体」，「最後のもの[質料]それ自体」という表現は例えば「統合体の質料」(640 b 26) という表現と対比されるべきものである。後者は統合体を前提にし，何かの質料として特定される。例えばカリアスの「この骨や肉」という仕方で。それは「可能態において或るこれ」(1042 a 27) と指示されるカリアスであり，「現実態において或るこれ」と指示されるカリアスと同時である最終質料のことである。それに対し，ここで質料それ自体が問題になるのは，質料実体論者の主張を吟味するためである。それが第一基体性条件を構成する自己同定基準によれば，質料を独立にそれ自体として見る時，それは自己自身と同一であると主張することのできない，いかなる範疇存在にも属さない，「何ものか」でしかない。それ故に，質料はそれ自体としては第一基体ではない。

もはやそこでは，実体が第一基体として特徴づけられる「他のものであることなく，まさにそれであるところのもの」(73 b 7 f) という記述を受け付けないであろう。「最後のもの[質料]はそれ自体では何であるかでも，どれほ

どでも，他の何ものでもない」と結論される質料は本来的述定を構成することができず，実体がそれについて述語づけられるとしても，付帯的な述定であると理解すべきである。質料実体論者はそれが究極の主語となることから，「他のものが実体について述語づけられる」実体に並び実体であると主張するであろうが，それは不可能である。自己同定基準を満たしえないからである。即ち或るこれ性条件と離存性条件を満たさないからである。それ故に，「かくして，これらに基づき考察する人々には質料が実体であることが帰結する。しかしそれは不可能である」と結論づけられる。

結論

ここに，「質料それ自体」により第一質料を読むことができるにしても，それは四元素の単純な運動，変化のあるところでは常に何ものかとして基に置かれるものであるという意味では同一の機能を持つものであるが，「或るこれ」という指示を受け付けることのない，それ自体自己同一性を保持するものであると語ることのできない何ものかのことである。従って，四元素のもとにある第一質料についてピュシコスなアクセスは認められず，ロギコースに存在要請されるものである。せいぜい四元素の循環が現実の大地，水，空気そして火の観察を通じての間接的な検証により確かめられる程度であると思われる。アリストテレスはこの章においてピュシコスな第一質料の探求を課題としてはいない。第一基体性条件を満たすと主張された質料がそれ自体としては実体でないことが明らかにされたこと，さらに第一質料はロギコースにこのように論じられ存在主張されることを確認できたこととして，ここでは満足しよう。

註

(1) T. Irwin, *Aristotle's First Principles*, p. 9 (Oxford 1988).

(2) 千葉恵『アリストテレスと形而上学の可能性』。p. 67，p. 114（2002 勁草書房）。

(3) 同掲書　p. 24.

(4) M. Wedin, *Aristotle's Theory of Substance The Categories and Metaphysics Zeta*, pp. 180-182, p. 191 (Oxford 2000).

(5) Ibid, p. 38.

(6) 『形而上学』Δ 8 章において，アリストテレスは「究極の基体」を，Z 3 同様に「meketi もはや……ではない」という表現により記述している。「なお，その説明言表が定義であるところの本質，これもまたそれぞれの実体であると言われている。この点で，実体は二通りの仕方で語られることが帰結する，もはや他のものについて語られることのない究極の基体であり，また或るこれであることにより，離存的であるところのものである。形態と形相がそれぞれのそのようなものである」(1018 b 21-26)「二通りの仕方 (kata duo tropous)」ということにより，二つの存在者のことを理解する必要はない。もはや他のものについて語られることのないことにより，究極主語基準と自己同定基準を満たすものとして，或るこれという指示が可能である離存的な存在者が理解されうると思われるからである。実体の候補を枚挙することを目標にしているこの章において，「単純物体」(1017 b 10) は「基体について語られない」ものとされているが，「meketei」という強調は見られない。「本質」(b 21) を論じる文脈において，この表現が見出される。

(7) D. Bostock は，例えば次の可能性を述べている。「ひとは Z 3 におけるこの議論[質料は実体ではないという議論] は端的に Z 巻の残りの箇所と H 巻の大半と両立しないと想定するかもしれない。(われわれが見るように，Z 13 についてこの結論を避けることは窮めて難しい)。この解釈の最善の版は第一質料の全体の議論 (a 9 から a 30 まで) はこの議論を全く欠いていた Z 3 の元来の版への後の付加であるというものであろう」。(p. 80) また彼は「何故アリストテレスは，残るこの質料は知覚可能ではないということを含意せねばならなかったのか。……これはむしろ神秘的に思える」と主張する (p. 77)。彼は，この質料が知覚不能であるとされる「第一質料」のことを意味する以外にないと結論する。しかし，彼はこの解釈の困難性として，当該のものの様々な属性のみならずその「能力」までも抽き去るとされているが，「しかしそれはどんな種類の質料からも固有の形相を受け入れる能力を抽き去ることは不可能」であることを指摘している。結局彼は，抽き去られるもののイメージに関してアリストテレスは「幾分不正確」(p. 77) であったと非難する。

M. Loux は 15 頁にわたり諸説を検討した後に，「(アリストテレス自身の) 初期の理論である実体の基体性基準への攻撃と思われるものは，真実にはその基準が組み込まれている全理論的な枠組についてのアリストテレスの評価の形式的な宣言である。しかし，もしそれがこの点に関して成功しているにしても，それは過度の問いを引き起こすという犠牲のもとにおいてのみの成功にすぎない」(p. 70) と悲観的な結論を述べている。

D. Bostock, *Aristotle Metaphysics Books Z and H* (Oxford 1994), M. Loux, Primary Ousia (Cornell 1991).

(8) A. Code は「単に質料としてではなく，第一の質料として諸元素の基体を扱うさいに問題になっているものは一体何であるのか。伝統的にはアリストテレスは第一質料の概念を述定の概念への言及により導入したと考えられてきた」と述べている。A. Code, Potentiality in Aristotle's Science and Metaphysics, p. 226, *Form, Matter and Mixture in Aristotle*, ed. F. Lewis & R. Bolton, (Blackwell 1996).

(9) 「形態 morphe」という語が「形相 (eidos)」と同じ役割を持つものとしてここで用いられている。それは Bostock が言うように「彼はしばしば「形相」を「形態」として注解するのは，疑いもなく彫像が彼のお好みの事例だからである」ということであろう。(*ibid*, p. 72)。

(10) 「把握し損ねる」と訳した diapheugei を正確に理解しなければならない。元来「逃亡する」という意味を持つこの語は認識論的な次元で用いられる他の類似の箇所を参照する時には「把握し損ねる」でよいと思われる (cf. 316 a 17, 1001 b 28, 1002 a 27, 1216 a 9)。

(11) M. Schofield, Metaph. Z3: some suggestions, p. 98 (*Phronesis*17 1972).

(12) M. Schofield はこの箇所を従来どおりに「しかし長さ，幅そして深さが除去される時，もしそれらにより定義されるものが何ものかでなければ，われわれは何も留まるものを見ない」と訳し，次のように不満を述べている。「長さ，幅そして深さが一つの事物から除去されるとき，それにもかかわらずそれらにより定義され或いは一定なものないし限られたものにされる何ものかがあるという想定から仕立て上げるものが何であるかを知ることは私には難しく思われる」(p. 98)。そして彼は「unless 以下は不適切な欄外注である」と言う。*Ibid*, p. 99. 私の読みは従来のものと異なるものであるが，それ以外に読みようがなく，しかも，その読みの正しさは数行下の範疇存在者の否定がいかなるものであるかの記述により保証されよう。そこでは範疇の「諸否定は範疇のどれでもない。というのもそれらは付帯的に範疇に属するからである」(1029 a 25 f) といわれている。アリストテレスの慎重さがこのような留保を付させるのである。

(13) M. Wedin, *ibid*, p. 177, p. 1941, F. Lewis は同様の趣旨で次のように述べている。「a 11-19 の主要な議論に続いて，アリストテレスは a 21-26 で補助議論を加えているが，それは a 18-9 そして a 26-7 でその議論を枠づけている結論つまり (第一) 質料 (のみ) が実体であるという結論を支えるために計画されたものである」。しかし，これもアリストテレスが枠ずけている二つの文章が異なることを，つまり主張を弱めていることを考慮していないことからなされる解釈である。F. Lewis, *Substance and Predication in Aristotle*, p. 294 (Cambridge, 1991).